013548−000−2

特62−428

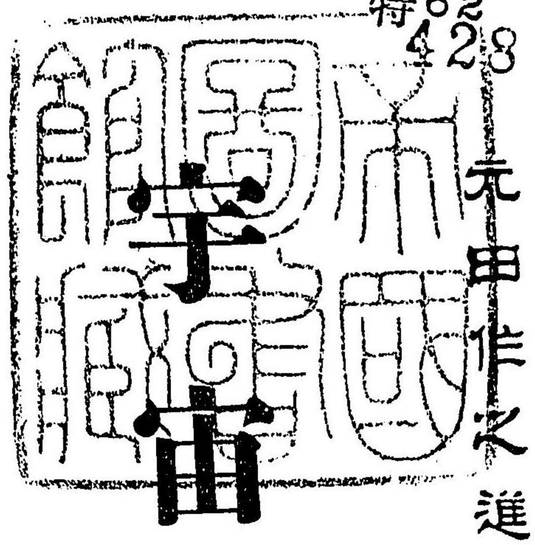
宇宙之心

フラートン／著

M41

ABA−0009

特62
428



元田作之進譯

學問之心

東京 警醒社書店

本書は米國コロンビヤ大學哲學科教授フラートン博士の著はされたる A plain Argument for God と云ふ小冊子を譯したるものである、嘗て同博士がペンシルヴァニヤ大學にありしとき、予は其許に學びたりき、一日博士と共に旅行し途中談偶々此小冊子の事に及び、予は之を日本語に譯することを許さるゝやと問ひしに、博士は快よく之を諾せられたり、全體此書は、哲學的に神の存在を論じたるものなれども、哲學の素養なきものにして、普通の理解力を有するものには、能く了解の出來る樣に極めて平易に論せり、是れフラートン博士の特長にして余は殆んと三年間博士の敎授を受け、其言語と云ひ、其引證と云ひ、如何にも平易にして而かも頗る明瞭なるに感じたり、深遠なる道理を平易なる言語に寫し出すことは普通

の哲學者に能くせざる所なるが、博士は多年の熟練によりて成功したるなり、又た博士は聖公會の長老にして頗る親切なる人なり。或人博士を評して彼は冷かな頭腦と溫かなる心緒を持てりと、予は多年博士に接して此評の當れるを知れり。

予は此書を譯するに當りて博士の平易にして明晰なる言語を寫し能はざるを恐る、讀者諸君本論に於て不明晰の處あらば博士の罪にあらずして譯者の罪なりと知り給へ終りに予の爲めに本書中コールリッヂの詩を和譯せられたる、友人木村重治君に謝す。

明治四十一年七月

譯者誌す

宇宙之心

第一章　普通の論證

元田作之進譯

神の存在を證明するに當り、最も單純なる議論は如何と云ふに、先づ次の如く論ずるのである。

世の中には色々な事が起りつゝあるが、鳥渡例を擧ぐれば、予が窓から秋の景色を眺むるときに、枯れたる木の葉が少し動いて居るが、段々其動作が烈しくなりて、終に二ひら三ひら翩々として枝を離れて落下するのを見る。

續いて、多くの葉が落ち來たり、終には地の一隅に高く積りて渦の如くに互に押し合て居る、全體是れは何故であらうか、予が窓から眺めた處では唯秋の景色と木の葉のみであつて外に何も見へぬが、何故に木の葉が動きしやと問ひたらんには、どんな子供でも「それは風が吹くからである」と答ふるに違ひない、其子供に風吹かずとも木の葉は動く事が出來るかと、問ひたらには「出來ぬ」と答ふるに違ひない、左らば子供ながらも何か原因がなければ枯葉は動かぬ、落ちぬ、と云ふとを知つて居る。

子供は多分これ以上は考へぬであろふが、此子供の答に就いて更に疑問を起したいのである、もし風が葉の動く原因ならば、風は如何にして起りしぞ、風の原因は何であらふ、若し

風を起すべき或る原因が見出さるれば、其の原因の原因は何であろふ、其又た原因は何であらふか、かく世の中のあらゆる出來事が此の落葉の如く原因ありとすれば、何事にても其原因、其又た原因に遡る可きではないか、而して其結果何時までも限りなく遡るか、或は第一原因に到達するかの一つではあるまいか。

科學者に問ふて見ても、世の中の出來事には必ず原因ありと信じ、原因を見出すまでは、假令ひ目に見るものにても理解せりとは云はぬのである、且つ又た原因の原因を研究するに就ても、中途にて休止せぬのであつて此原因の連鎖は無限であると云ふものさへあるのである。

神の存在を論證するにも、固より物には必ず原因ありとの立

論を承認すれども、其原因の連鎖は無限なりと言はずして、一原因に其端緒を發す而して其れは即ち神なりと云ふのである。何故に斯くは斷定するかなれば、第一原因を認めざるときは必意原因と云ふものは皆無にして唯結果の繼續となる、かゝれば其結果は一の原因をも有せざる結果と云はねばならぬ。是れは理性に於て考へ得られぬことではないか。扨て今凡ての出來事に原因ありとすれば、其原因は其出來事を生ずるに、適當なる原因でなければならぬ。

木の葉が動くのを見ては風の吹くのが原因であると知らる、されど家の建築せられしを見て、是れも風の吹くのが原因であると云ふものはあるまい、家も風もどんなものであるかと云ふとは知つて居るが、風が家の原因であると云ふとは想像

するだも愚なことである。即原因と結果との釣合がとれて居らぬからである、吾人がかの「アラビアン、ナイッ」を讀むとき、奇異の感に打たれるのは、其記事が因果の律を無視して居るためである。「ランプ」を摩すれば幽靈が自分に從ふと云ふ理屈はないではないか、數言の呪文を唱ふれば、人が犬に化け猿が人に變ずるとは、薩張り譯が分らぬではないか、吾人が如斯理屈はあるまいと云ふ所以のものは、原因として記されたるものが、結果として記されし事を生じ得ぬと云ふ事を知て居るからである、人が年長けて後、此話しを讀で快味を覺えぬのは是がためである。小供はどんなことが自然であつて、どんな事が不自然であるかと云ふ區別が付かぬ、故に「アラビアン、ナイッ」を讀んで面白がるのである。

是故に原因と結果とは相適したものでなければならぬ、家の建築を見ては建築師あることを知る可く、其の建築が新奇にして巧妙なれば、從つて其建築師が非凡の妙工であることを知る、誰でもこんな工合に事物を觀察するのである、能く例へに引かるゝことであるが、若し人が野原に於て一個時計を發見したらんには、此時計は時計師の心と手が原因であるので、其他に原因があるとは想像しまい。如何となれば時計師の心と手のみが時計を造るに適當であるからである。かく凡ての物には其れに適應せる原因が必要だとすれば、一定の組織あるものを生ずるには、其組織を案出す可き心意が其原因でなければならぬ筈である。然らざれば「アラビアン、ナィッ」の話の如き不合理に陷らねばならぬ、眞鍮の馬が人を乘せて、

天空を驅けるといふがごときことを信ずるは、此意匠あるものを、意匠を立て得ぬものが造れりと信するよりも笑ふべきでない、今世の中を見よ、何物にても或目的に適應して居ることの明白なる證據を認むるではないか、自然界の全體を通じて手段は目的に適して居るとの感じは起らぬが、目を開いて見よ、世の中は最も驚く可き緻密なる器械であると云ふことを悟らずに居られようか、一の時計と一の身體とを比較せよ、其構造に於て、其細工に於て、孰れが最も驚く可きものぞ、而して身體なるものも、單獨に考ふれば鍵なき時計の如く、不完全なるのみならず、全く不用のものであるからには、自然界に於ける他の物と連帶して考へねばならぬ。即ち食物や水や空氣の如きもの、即ち身體の存在に必要なるもの

と連ねて考へねばならぬ、斯く推考すれば、自然界は一事一物として相關せざるはなく、自然界は一個の組織體にして意味あり、方法あり、目的あるとが分る。是等の理由に依り、其處に此組織體の創造者にして此構造體の創作者たる、智あり、力ある宇宙の第一原因があることを推論し得られぬだらうか。更に一歩を進めて觀察すれば、世の中のもの凡て手段と目的と相適應して居るのみならず、其適應が凡て善に向つてなされて居る樣である。自然界は悉く善良なる目的に向つて進みつゝある如く觀察せらる、即ち自然界たる全體の組織は善なるものにして、其秩序、或は目的には、道德的の意味あるとがわかる、さて自然の組織あるを見ては、其組織者に意志なかる可からずと云へば、更に進んで善良なる組織の創設者は

善良なる意思、即ち道德上善とすべき意思であるといふべきではないか、即ち此の意思に對して、われらが神なる語を用うることは、出來ぬだらうか、是れは即ち宇宙の組織より神の存在を證明する論法である。

以上の論法に二の部分かある、一は世の中の出來事よりして第一原因に遡るのであつて、其第一原因の性質如何は問ふ所でない、一は世界の性質より第一原因の性質を、智なり、善なりと説明して神に及ぶのである、この論法は隨分古き證據論であつて、多くの思想家を首肯せしめたものゆへ決して輕々に看過す可きものではないが、然かし質問したいとは、既に神を信じ、而して現に其神が此世に在ますことを感じて居る者が、右の論法によりて、己れの宗教心を滿足せしむるであらう

か、これにより幾分でも神が已れに關係あるを感得するに至つたであらふか、原因の連鎖は無限なる能はざる故、第一原因に達せねばならぬと云ふ論證や、其他右の存在論に提出せられたるとは、孰れも誤りなしと斷定しても、矢張り神を遠景に眺めて神を求めつゝある人の宗教的經驗より神を引き離す如き感じは起らぬか。假りに右の證據論を求道者に提出せんに、求道者は「然り、全然其論證通りです、神が此世界を創造し給ひ、自然界を動かし給ふたとを信じます、が、神と世界との關係はそれで終りましよふ、神か今尙ほ私と個人的の關係を有し給ふと云ふ證據は立ちません、神の働きは過去に屬し、現在に屬しません」と云ふであらう。從來の證據論は是等に向つて何と答へ得可きぞ、若し今日の世界に於て組織

の善なることが、神の善良なることを證す可きなりと云はんか、彼れは矢張り此世の組織の善良なるを證明するには先づ第一原因に依り、其第一原因が善良なりしを推論するのであつて、神は依然として過去に働き給ひし神なるのみである。

世には斯の如き反對の精神を以て論ずるもの多く、從來の證據論は到底人の宗教心を滿足せしむることは出來ないのである。從來教會の教義はシエスチック（Theistic）であつて、ディエスチック（Deistic）でない、元來予は專門家の學語を避けて、普通の言語を用ふる目的なりしが、此二語の間には明白なる區別あるゆへに、茲に學語其儘を用ふるの便利あるを思ふのである、シィエスチックもデエスチックも共に神と云ふ字よ

り來れるものにして、前の字は希臘語、後の字は羅甸語である、然るに元來此二字を同意味に用ゐずして、區別を付けるのである、ディエストもシエストも、共に神の存在を信ずるものに相違なきが、ディエストは神を第一原因、萬有の源として信ずるのであつて、シエストは、其神は現在萬物の主宰者として常に人と直接關係を有し給ふを信ずるのである。

さて本章に於て論じ來りし論法は從來のディエストなる有神論者が證明したる所のものにして、シエストの信ぜんとする所の證明はせられてない事が分かる、然かし余のかくいふを以て、かゝる論法はシエストでないと誤解してはならぬ。恐らく彼等もシィエストに相違ないのである。然り、余はかれらも議論に關らずシエストと言ひたいのである、何故なれば、彼等

は多分自己の信仰を自己か論證し得ないからである、この議論に就いては、次章に述べやう。

第二章　心の搜索

自然界に神を探し得るや否やと問ふに先ち若し探し得るとせば全體神を探すとは如何な方法によるべきか、其等の考が明かでなければならぬ。然らざればわれらの探索は骨折損ならざるを得ない。神なる語が、目にて見、指に觸るゝ物質でないことを意味するにも拘はらず、物質を探すに適したる科學的方法を用ゐて、自然界に神を探したらんには、好果を收むる能はざるや論を俟たない。斯の如き方法で神を探りて而し終に探り當てざればとて、神は存在せぬと斷定する權利はないの

である、神てふ語は如何なる意味か、其れに就き多少の考へがなければ、神が存在するとか存在せぬとか云ふ論を立つる資格はない、如何となれば何處に向つて論證を求むべきかそれが分らぬからである。

昔より問題となれる六ヶ敷議論に立入らず、人が誰れでも許可して居る範圍内に於て云へば、神なる語は少なくとも一つの心即ちペルソナを意味されているのである、そこで、自然界に神を探し得るや、否や、との疑問は、つまる處、自然界に心が表現されてあるや否やの疑問である、其心とは我々の心より一層大にして且つ博きものなるべけれども、矢張り一の心に違ひない、斯の如く神を探すとは、心を捜すことであれば、其方法も普通に心を捜す方法に依らなければならぬ、他

の方法では目的を達せない、故に普通に心を捜すには如何なる方法を用うるか、又た心を捜し當てたと云ふ場合は如何なる場合を云ふか、此問題は本章の主論である。

現今では兒童の研究が段々進んで、赤子が生れ出で來た時に有して居つた心は、母親は無論の事、世間一般の人でも、發達して居るものゝ樣に考へ過ぎて居る、始めて光に顏を向けて目をひらく、赤子は大人が見るが如く、物體が見へるのであらう、小い手足を無暗に動かすのを見ては、其理由を知りて動かすのであらふ、聲を聞いて驚くのを見ては、多年音響に經驗ある人々の耳に響くのと同じ意味であらふと、人は想像すれども、そふでない、實際は是等の知覺力は漸々に發達するので、兒童の心を研究する人は、兒童の腦中にある材料は意外

に乏しきものなることを發見しつゝあるのである、而して又此乏しき腦からして終にニュートンやカントの如き豐富なる知惠にまで成長する理由をも與へつゝあるのである、是等の事を理解するには左程困難でない、例を擧けて説明しよふ。

今余が机上に、林檎が横はれりと假定せん、予は之れに觸れた事もなければ、嗅いだともなければ、又た味はつたともない、唯見た丈けである、加之、目に見る部分は唯〻林檎の一方のみであつて、全體は見えない、而かも之を指して林檎と云ふのは。之を二つに割れば、内は赤くなくして白くあると云ふ考へも持ち、又其中心には黑色か褐色の小さものがあつて、此れが種子であると云ふとも知て居る、斯の如く林檎に就て

實際見る所よりも澤山の智識を予が心の中に蓄へて居ることが分る。これ其赤色の一部分を見た丈けで、他の事は皆過去の經驗より供給されたのである、之を轉がしたならば、他の部分も見るとが出來るであらふ、割つたならば白色のものが見へるであらう、中心には種子があるであらう、是等は現在の實驗でなく、過去の經驗より得たる智識である、若し過去の經驗なかりせば、唯外部を見た斗りで、凡て是等のとをどうして想像することが出來やうか。林檎の堅いとか、柔いとか、重いとか、其味が甘ひ臭ひ等を一寸見た斗りて凡て是等の事を林檎に付けて仕舞ふのは如何、林檎の堅いと云ふは、色でもなければ重さでもなく、又味ひでもなし、又見る事も出來ない、而も予は能く夫れを信じて居るのは何故ぞ、必竟するに是等

の性質は各相異なれるにも拘はらず、予が過去の經驗に徴して是等の性質が何時でも相聯想されて來る。即ち林檎の色を見れば、直ちに其林檎の堅さ柔さを思ひ、嗅ひや甘さを感ずるのである、もし予が生涯に於て、唯物を見るのみにて、其物に觸れしことなかりせば、此林檎の場合に於て、色の感覺の他に、觸感、味感、嗅感の經驗を持つ筈があるまい、又若し林檎なる觀念は此等の經驗の總合より成れりとすれば、予の前にある林檎を唯見た斗りて、林檎に關する他の經驗なしに、林檎と云ふ眞の觀念の出でよふ筈はあるまい。

今保姆の腕にある赤子を机の傍に連れ來り、林檎を前に置きて、其色を見せしむると假定せよ、又其赤子は未だ色の感覺が其心に起るとき、直ちに觸感をも共に起こすと能はざるもの、

即ち見へるものは又觸れるとも出來ると云ふ如き經驗を有せずと假定せよ。かゝる場合に於て、赤子は色の感覺を有するのみにして、他の經驗は全くこれに伴はないではないか、赤子が若し林檎の種々なる性質に就て、大人の考ふるが如き考を有するならば、其智識は漸次成長したるものにして、一の感覺が度々他の感覺に伴ひ、終に此の感覺が相連結して、何時でも同時に來るものと云ふことを學んだのである、斯の如くして林檎の觀念は成長したるものである、此理由は、又赤子が自分の身體に關する智識に就ても同樣であつて、自分の眼前に小さな白きものを見て、是は自分の手である、見るとも觸れるとも出來るのである、之を以て他に觸れるとも、或は他より之に觸れらるゝとも出來るものだと云ふことを知る道理がな

い。大人なれば、一本の手を見ては、此等の事も聯想するが、是れは全く過去の長き經驗に基くのである、然るに赤子は斯の如き經驗を有して居らない、是れに依て之を觀れば、最初赤子の心に來る種々の感覺は何の意味もないに相違ない。其感覺は何を意味するか赤子は丸るで知らぬのである。而して又發達するのは單に段々感覺することが增すことのみならず、其等の感覺が皆意味を有して居ることを發見するのである。即ち現在に有する感覺よりして未知なる感覺を推考し得るに至るのである。これが即ち心の發達である、火傷をせる子供が、火を恐れる樣になるのは外でもなく、一度火を見て其熱さを感じたが故に、再び火を見れば、今度は其火に觸れないでも、熱いと云ふ感覺を起すのである、即ち火を見ると同時に一

種異なつた感覺を聯想するので、此感覺を好まぬから恐れるのである、感覺に意味が出來るとは即ちこれで、視覺が直ちに觸覺に結び付て仕舞たのである。視るべき火なるものは燒くとが出來ると云ふ智識が發達したのである。斯の如く子供は感覺から感覺を段々聯結して、最初個々獨立の感覺が終に秩序あり、意味あるまで發達進歩するのである。且更に進んで子供が自分の身體や、又自分の周圍にあるものに就て多少の智識が出來たと想像せよ。子供は自分の手を見て自分の手であると云ふことを知り、又其手を見ることが出來る如く其手に觸るゝことも出來ることを知り、又其手を以て他の見られ得る物を觸り得ることをも知る、而して又其手は林檎と同じものにあらずと云ふことを知る、兩者共これを見、これに觸るゝことは

出來るが而し林檎に觸れた工合と、手に觸れた工合とは同樣でないとも分るのである、人が林檎を碎ても、別に何の感じも起さぬが、手を碎けば大なる影響がある。林檎は子供の心に左程必要に思わぬが、自分の手は自分にとりては甚だ必要であると思つて居る、林檎を割つても痛くはないが、手を割れば痛い、林檎が轉ろけて他のものに觸るれば、子供は唯之を見るだけであるが、手が他のものに觸れば、子供は之を見るのみならず、之を感ずるのである、是等の經驗により、又是等の比較により、自然に子供は自分の身體は快樂苦痛に關係あるものである、又他の物體を知り、且つ自分の心にて他の物體を動かすとも出來ると云ふことを知るにいたる。明白に語に表はし得されとも、自分の身體と自分の心とは密接なる關

係の存して居ることをも知るに至るのである。

子供が成長するに從つて、自分の周圍には自分の身體の如き身體を有するものか澤山あることを覺る。自分の保姆や自分の母も、自分と同じ樣な身體を持て居ることが分るに至る。子供の智識が尙進歩するに從つて、此物とかの物とを區別する樣になる、而して保姆の身體や母の身體は自分の身體と同じ種類に屬することを知る、尙又自分の身體が動き樣によりて、愉快にも感じ、又不愉快にも感するのである、身體の情態と心の情態とは自ら關係があることを推理するに至る。それからして又保姆や母の心の有樣を推知すに至るのである。最初に子供自身の體に傷を受けたときは、痛いと云ふ感じを起し、故に自分の身體に似てゐる他の身體が同樣の傷を受けたらば

同様に痛いと云ふ感じが起るに違いないと推論する、子供は其痛みと云ふことを見ることは出來ない、又他人の心を見ることも出來ないが、唯實際見る所のものより推知するのである。即ち自分の體に關して經驗したる心の情態よりして、他人の身體と其心の情態との關係を説明するのである。

此に注意して置かねばならぬことは、子供が他人の心を知ると云ふことは、前に云ふた通り、其人の身體の動作身振り、顔付、言葉づかい等によりて、之を解釋するのであつて、自分自身の心の外、如何なる心でも直覺すると云ふことは出來得べからざることである、身體からして心意を推さなければならない。更に例を上げて之を説明せんに、子供が初めて母の笑顔を見たりとせよ、母の笑顔は母の愛情が外に表はれたるも

なれども、外に見るのは笑顔のみで、愛情は見る譯にいかない、笑顔は見、然らは如何にして子供は母の笑顔の意味を知ることが出來るで有ふか、笑顔を見て笑顔と全く異なれる而も見へない愛情を知ることが出來るかといふに、自分が笑ふ時に感ずる心情を知つて居るから、それで推測する外はなかろう。自分で嘗て愛情の經驗を有せずして成長せしならば、人の笑顔を見ても、夫れか愛情の發展だと云ふことを知ることは出來ない、身體の運び樣、言葉遣ひ、顔色を見ても、何の意味もあるまい。われらは人の顔を見る如く、人の心を直接に見ることは出來ないと云ふことを記憶せねはならぬ、唯他の身體の有樣を見てそれから推考へて、心の狀態を思ひ起さねばならぬのである。思ひ起すとは前に經驗した事を再び心に

思ひ出すのである、性來の盲者にて色の何たるかは分らぬ。何故なれば盲者は色の說明を聞けとも、色と云ふ語に相應したる實際のものを經驗したることなれば、我々がもつて居る樣な考が起らない、色の經驗なきものには色と云ふ語は唯の語のみにして無意味である。

故に人が他人の心を其言行によりて知ると云ふのは、自分の思想と言行との關係よりして推察するのである、自己の經驗を基礎として、他人の心を自分の腦中に描くのである。

如何なる心にても此方法によりて知るのである、犬にも心ありと知る所以のものは、犬の動作を見る故である、自分が希望する時、恐怖するとき、怒るとき、愛する時等に自分の身體を動作するのと類似したる事から推測するのである。此馬より

彼馬の方が怜悧であると知る所以は、矢張自分の經驗よりして、馬の擧動を見て知るのである。海綿には心ありや否や、の疑を起す所以は、自らの動作に符合する樣な擧動が毫も海綿に見出すことが出來ぬからである、然かしかく吾人が知る事の出來るのは、前にも云ふた通り、直接に其の心を知るではない、凡てこれ身體の擧動の如何によりてゞあつて其心の賢愚、强弱、明遲を知る、皆これ經驗に依るのである、要之身體の動作が心を知る唯一の標準なのである。故に前に云つた身體は心意を表はすと云ことは、これで明解せられたりと思ふ、勿論色の場合の如く、心が身體の表面に現はるゝ譯ではない、或は林檎の種の如く、身體中に發見せらるゝと云ふ譯でもない、如何に愚昧な人でも、友人の心を見ると、友人の假髮(かつら)で

も見るが如くならんとを望むものはあるまい、又身體と心とは同一物でもない。もし同一物ならば、身體は身體、心は心と區別する必要がないではないか、身體が心意を表はすと云ふたのは、身體の動作によりて思想、感情、意志の發表とでも云ふべきものを認め、夫れによりて心と云ふ肖像を自分の中に作るのである。

われら生涯の間、以上の如き方法によりて他人の心を探して居る。かゝるが故に、其探し方は非常に迅速で又容易で一々其順序や、進歩を考へずして、ずんずん、他の心が知れて行くのである、宛も讀者家が其書物に感興を起すや、文字あるを忘却し直に其思想を含味するが如く他の心を解するのである、これがわが所謂心の探し方で、これより他の方法に依らば必す

失敗に終るに違いない。

第三章　自然に於ける神

前章に論じたる理由によりて、吾人が心を見出したと云ふは、決して直接に其心を見、或は觸れ得たりと云ふの意味でないことは明かにされたと思ふ。如何なる心に於けるも、同一の方法を以て、即身體の上に顯はるゝ現象を解釋し、其現象によりて以て多少心と云ふことを悟り得るのであることも分つたと思ふ。前章に於ては此事を説明せんために、人の心よりも劣れる心、即ち犬或は馬の心に就て述べたが、吾人が經驗する所によりて、更に高等なる心を表はす現象あらば、矢張り同一なる方法を以て高等なる心の存在を推知し得ること

が分るのである、父の面前に立ちて、其語を聞く時は、其子は必す父が心を有し、而して父の心は己れの心より優れりとの考へを起すであらう、子は固より其父の心を充分に知る能はざるを推知して居る、然れとも父の顔色又其言語より推して、父に心あり、而して其心は己れの心よりも高尚深遠なることを明に知て居る。

吾人か日常遭遇する人の中には、吾人をして自分の思想の及ぶ能はざるを感せしむるものあるは、常に經驗する所ではないか。斯の如き感動を與ふる所以のものは、其人の言動に於て明かに吾人の心よりも更に高尚なる心を有するものなるを曉らしむる所あるに外ならない。凡ての人均しく自由に生れたりとするも、其心の力に於て均しからざることは、尚ほ

其體力に於て均しからざるが如くである。而して優等の人が他の劣等なる心を覺知する如く、劣等なる人が優等なる心を認識す。平凡なる人も尚ほニュートンの心を窮ひ知るとが出來る、かく他人の身體によりて、其人の心を覺知することが出來れば、同一の方法を以て人間以上の心を覺知することも亦難きことではあるまい、若し一方に於て吾人と異れる犬或は牛を見る如く、他に吾人と異なれる者に遭遇せんに、而して其者の行動が吾人が自己の思想を現す時の行動に相似たる所ありて、唯そが吾人の行動よりも一層復雜なるものなること、尚ほ吾人の行動が、下等動物の行動と異なる如き所あることを觀察したならば、吾人は直に其者の心あるを推知するに違ひない。而して其心は吾人の心よりも更に高尚なるとをも推

知し得るであらう。かく現象の異同によりて又解釋の異同が生じて來る、もし又右に述たる如きものに遭遇したる後、更に其人よりも高尚なる行動を有するものに遭遇せんか、吾人は同じき推理をなして、其人に心あるを曉り、而して其人の心は、以前の人の心よりも異なれるを知る、唯斯の如き推理法に一の制限を付すべきは即ち之れである、諸君の知らるゝ如く、身體に於ける或現象は、常に心に於ける或現象を意味するのであるから、他人の身體に同一の現象を見るときは、從つて其人の心に於ける同一の現象を推測して云ふからである。他人の身體に現はるゝ現象が、自己の身體に經驗するものと異なれるに從つて、又双方の心の異なることをも推測することを得、若し他人の身體に於ける現象と、それの身體に於ける經驗と

が全く相違せるが如きに於ては、其人の心を以て已れの心と相似たりとの決定を下すことは出來ない、畢竟するに心の表示たるべき現象を見て、其心の存在を見、而して其心の性質如何は其表示せらるゝ現象の性質如何によりて定まるのである。

今此論法を神を見出すことに應用せんに、古代よりして思慮ある人は、自然は多くの心を表示すると共に、一の大なる心を表示する事實を深く意得して居る。吾人の周圍を眺むれば、人には種々の心あり、下等動物にも又種々の心あるを發見す、而して其心は夫れ〳〵動物體たる各自の小組織體によりて表示せられて居る。然れとも第一章に於て既に論じたる如く、此等の諸物體を一々精密に觀察すれは、實は各自、孤

々獨立せるものにはあらずして、自然なる大組織の一部であつて、自然の法則によりて相互に依頼して居るものであることが分る、即ち體は周圍のものによりて生存して居るのである、其生るゝや、周圍のものより生れ、其失するや又周圍のものに歸る。生死と云ひ、榮枯と云ふ、皆是自然界の法則に屬する一部分である、故に此身體が現在生存活動し得る爲めには、自然の諸勢力は其生存以前に於て既に活動して居る者でなければならぬ。而して是等の諸勢力は又自然の法則に從へる他の諸勢力に服從せしものたるを認定せねばならぬ。身體が異なれば、其原因たる諸勢力も各々異て居ることが分る。宇宙は人體の組織に似たる所があるを示して居る、即ち各部相依頼して、大組織の中に其の位置を勤とめて居るので

ある。

是故に我身體は此組織の一部分にして、我心も亦た同樣なることを認定せねばならぬ。若し他の體ありて、我身體を擊たば、我は我心に苦痛を感ず。若し擊たざれは、更に苦痛を感せぬ。之に反して我若し他人の身體を擊たば、其人に心あらば、必ず其心に苦痛を與ふ可きを知る。而してこれ等の諸心諸物は合して一組織をなす。之を廣義に自然と稱するのである。從て起る問題は、われ其一部分として附屬する自然なるものは果して如何なるものぞと云ふことである。一方に於ては、此自然なるものは、恰かも我身體の如きものなることを知る。如何となれば、各部相結び、一組織を成したものであるからである。然れとも更らに進ん

で、我身體が我心を表示する如く、他人の身體が其人の心を表示する如く、此自然なる一大組織は心を表示するや、其部分たる所のものが、各目の心を表示する如く、自然の全體は、一の心を表示するや。而して、吾人は自然の全體に現在する心の表示を見て、果して其心の性質を推知し得べきや、推知するとすれば、其心は如何なる種類ぞといふことは、毎々起る問題である、古來思慮ある人々の多數はこれに答ふるに、斯くいふて居る。然り、世界は道理と意匠の驚く可き適用を以て滿さる、其處に吾人は一大心を推知す。而して其一大心の力には一ッの制限をも見ること能はずと、今斯の如き確信を有する人に向つて、其一大心以外物の現象によらず、他の方々に依りて示さんことを望む

は、恰も他人の心を直接に示せと云ふと同一にして、無理なる問題と云はねばならぬ、彼れは人の身體を示すことを得べく、而して其身體は如何にも道理的に活動することを示すことは出來るが、これ以上の事は到底示されぬ。又人の要求し能ふ所ではない。吾人が此一大心に對する態度も、亦宜しく他人の心に對する態度なるべく、而して同一の證明を以て滿足す可きものである。故に問題の歸着する所は、宇宙間事物の組織は果して道理を表示するや否やと云ふにあり。表示するものとすれば、問題は既に定まるのである。

然しながら尚ほ、或は反對するものあるかも知れぬ。心を表示すると云ふ丈ではまだ曖昧な所がある。何故なればこれに

は慥かに二の全然區別すべき意義があるからである。即ち今吾人は時計は心を表示すると云ふ場合に、時計に心ありと云ふ意味ではなくして、時計を造りし時計師に心ありといふ意味にもとれ又た時計が直に心を表示するといふ意味にも取れるではないか。されば孰れの意味に於て自然は一大心意を表示するにや、自然に先ち或は之れと連結されてある他のものに心あることを推知せしむるものなるや。或は人の身體が其人の心を表示するが如く、直に自身に一大心あることを表示するや、これが問題である。

時計が心を表示するといふことは、どうして、吾人は信ぜらるべきか、時計の行動は如何にも吾人自身の行動に能く似たるところがあるからして、吾人の心の如きものが、時計にも

存在す可しと云ふことは、誰でも思ふまい。時計師に就ては斯の如き推理法を用ふるも、時計にこの推理を應用はせぬ。時計に就ては即ち次の如き推理法を用ゆ。

吾人は經驗によりて、吾人の身體は他の物體の上に活動し、其性質及び組織を變更し得ることを知る。又吾人は如何にして他の物體を配置すべきかの方法を心の中に形成し、而して我身體の活動によりて此方法を其物體に應用し能ふ事を知る。他人の身體を觀察するときに、其身體によりて動かされたる事物は、又一定の方法に從つて配置せることを感ず。即ち吾人の身體によりて其事物を動かし、吾人の心中に計畫したる方法を其事物に加へたる如く他人も亦其事物を配置する樣に思はれる。例へば、雨を凌ぐに、樹木の洞窟に避くるを

不便なりと感じ、更に好き避け所を設けんとの觀念を起し、棒を組み、藁を蓋ひたりと假定せよ、棒と藁との配置は我心中の計畫より出でたることを知る、若し其計畫がこれと異なりしならば、隨つて必す其構造も違つて來るであらう。又他人の身體が活動して、同じき構造を築くを見ば、而して其構造の終に完成したるを見ば、其結果たる、予自ら成せしものと同一なるを知ることか出來る、かゝるか故に、事物は必ず彼の心の計畫を示して居ることが分る。そは予が心の計畫を、物によりて表はして居るからである。然かし斯く曰ふ時、予は本より方法と小屋とを直に連結し樣と思わぬ。之を築きたる人と連結せしむるのである、小屋が方法或は目的を示すと云ふは、必ず人の身體を連結したる

ものなりと想像せしむるに足る表號を有し、而して其の身體の心に小屋の計畫を有し居たりとの意味に外ならぬのである。

故に時計が心を表示すると云ふと、時計師が心を表示すると云ふと、其間には大に意味の異なる所がある、時計師に就て云へば、其心を直接に表示すると云ふことか出來る、而して其表示する所は其心を有する人の以前に存在することに應用し能はぬ。現在此處に於て直に其人の心を表示するのである、然るに時計に就て云はば、時計以外のものありて、其の物の心を表示するのである、時計は吾人を其の物に紹介するに止まるのみである、孰れの場合に於ても、吾人の終極の推理は、時計師に於けるが如く、直接に人の心を表示する

ものにあり、時計の如き意味にて心を表示する物體は、單に人の場合の如く、心を直接に表示するものと連結せるものなるを認識せしむるに足る所の物體たるに過ぎないのである。

然らは自然が全體に於て一の心を表示すと云ふ、果して孰れの意味であるか、自然が若し實際心を表示するものならば、右の二ッの意義の中何れかを取らねばならぬ。如何となれば、心を表示するの道、右の二法より外にないからである。若し自然が心を表示するは、恰も時計が意思を表示するが如しと云はゞ、現在目擊する所のものよりして、他の一層直接に心を表示するものによらねばならぬ、恰も時計を見て時計師の心を推理すると同樣でなければならぬ、然れども原因から原

因に遡りて行つたなら、吾人は現在此世界に於て見るよりも、尙ほ直接に心の表示を認むることは出來よふか、吾人は目前の自然界、即ち一の時計と見做し得るの自然界、心によりて配置せられたる無心の物體を脫して、更に高尙なる意味に於て心を表示する他の物に到ることを望む可きであるか。

實に吾人が其一部として屬する此復雜なる自然は、過去も、現在も變らず、驚く可く又道理に滿ちて居るものである。確かに吾人は時計から離れて、時計師に行くが如くに、心の探索をするため、過去に溯る必要はないと思はれる、若し自然の中に表示せられたる心は、現在此處に於て表示せらるゝものならば、即ち如何なる時に於ても同一の方法に於て一大心

意を表示するものにして、更に他の物に到るの必要なしとすれば、吾人は前例に於ける時計よりも、寧ろ時計師の如く感想するの必要はないか、吾人の前に立ち、言語と行動とにより て其心を表はす所の人を見る如く、我等は此自然を見る時、感ずるではないか。何故に此世界を以て過去の心に連結して、現在の心に連結せず恰かも自動人形の如くに斷定するや、道理は吾人の中にも、吾人の周圍にも、現在活動して居るではないか。何故に吾人の棲息する此世界より此道理を驅逐し去つて仕舞ふのか。

さて、この自然の中に又自然の各部に表はされたる一大心意を稱して神と呼ぶのである。宇宙の事物を觀ること時計を觀る如く、唯過去に於ける心の現示を認むるものは、第一章に

論じたる如く、神を現在の世界より驅逐し去りたるものにして、唯此現在の世界に於ては、神が過去に於て活動し給へる結果のみを見るものである。若し人に對して、其人が過去に於て考へしとあり、感せしことあり、動しきとありと云ふことのみを知らば、其人に對して果して親密なる交情を有し得るか。既に死し去りたる人の靑史を讀むと、現在相語り、互に心を交通し得る人を見るとは、宵壤の差がある。神を以て單に世界創造の時に歸し、萬物の第一原因とするのみにて、神に號呼する靈魂に滿足を與ふるや否や。吾人尙近く神に接し得さるものか、通常神を證據する論法は、是れよりもつと、吾人を神に近寄らしめぬのである。然れども幸に人の確信は、時として其確信を證明する方法よりも道理に合ひ、眞實に近

きことがある。其論證の如何に拘らず、宗教心は常に神に近く感じて居る。人は己れが靈魂の日々の經驗によりて、現在に於ける神の善意を認識する。又此の世界の驚くべき組織の中に、萬物を包容す可き一大意思を認めて、一羽の燕の落るも、一輪の花の枯るゝも、其心意の意向にあることを見る。予が讀者に對して、漠然と遠き所に神を望むことを止め、現在接近せる神を見んことを願ふのは、決して此世界に於て神を發見す可き新奇なる方法を用ゐられんことを願ふのでもない、唯從來神を發見せられたる所の方法をして、一層明白ならしめんことを希望するのみ、思想に於ける不明瞭と不條理とは、屬々人を導いて自然に於ける種々の心意に對して、誤謬を生ずるばかりではなく、自然

の大心意に對しての觀察を不公平ならしむるものである。大心意に對するも、小心意に對するも、同一の論法を用ゐねばならぬことは十八世紀に於て、既に彼の博識高德の監督バーケレーは之を認識したのである、同監督の著は今日の人、尙一層の價値を與へて可なり、今は其著の中より神と人の智識に關する一文を掲載して、此章の結論となすであらふ。

故に若し人とは吾等の如く生き、動き、感じ、考へることを意味するならば、然しながら思想と運動の特別なる主義を推考せしむるに足る所の諸觀念の集合ならば、吾人は直接に人を見ざるなり、同じ方法によりて吾人は又神を見る、唯異なる所は觀念の集合にして、制限あり、狹隘なるものなら

ば是れ人心なり、孰れの方面に向つても、孰れの時代に於て、神性の明白なる表示を見る、吾人の見るもの、聞くものゝ、感ずるもの、其他諸て感覺に觸るゝもの、悉く神の力の現示なり、結果なり。

第四章　文學の證明

本章に於て、予が是まで述べ來りし神の存在に就ての議論と、又神と世界との關係に就ての關係は、決して新しき事でなく、又珍らしき事でもなく、人は古よりして斯の如き考へを持て居つたものだと云ふことを示すために文學より少しく拔萃しよふ。

固より其材料は夥多であるが、此處に拔萃するのは、少し斗り

に止めて置きたい。又其拔萃とても、殆んど手當り次第するのである。材料が澤山で、とても其中より撰擇するなどとは困難であるからである。

先づ第一は道德家なるソクラテスとアリストデムスとの對話なりとて、ゼノフオンが書いて居るものから始めよふ。アリストデムスは祈禱をしたり、犧牲を供したりすることに反對し、此等のことをなしたものを罵倒したるものと見ゆるが、ソクラテスは人體の構造よりして見れば、精神の證據があり、且つ仁愛の目的が存じておることを示めし、次の問を續け居る。

汝は精神の幾分でも自身に有してあると思か、汝の外には精神ある所の者は存在せぬと思ふ事が出來るか、而して汝の身體が廣大なる土の一部と、廣大なる水の一部と、其他のもの

、少部分より成れるを知りて、汝の有してゐる精神のみは、他の廣大なるもの、一部でないと思ふのか、汝の身體は無數の物體の集合なるが、其集合體は理性も何もない、或る物によりて偶然に維持せられてあると思ふのであるか。

アリストデムスは、夫れに對して曰ふのには、とんでもないこと、此集合體なる身體の中に精神と云ふよふな主權者が存在して居ると云ふことは想像が出來ぬ、斯の如き主權者を我身體の中に見た事がない。

ソクラテス、汝の靈魂は汝の身體を指導して居るが、これとても汝は見た事はない、左すれば、汝は何事をなすも唯偶然にするのであつて、精神ありてするのではないといふのだ。

かくてソクラテスは語を續けて、青年よ、爾の體中に存する

心は、爾の身體を思ふ儘に指導して居ることを考へよ、左すれば萬物に通貫してゐる精神が、萬物を思う儘に指導して居ることを信ずる樣になるのであらふ。

自身の眼ですら、遠方を見ることが出來るなら、神の眼は萬物を一時に透見することの出來ないでは無いか。汝の心は此處にあるも、なほ埃及やシ、リーにあるものを考ふる力ありとすれば、神の心は萬物を同時に考ふる事の出來ない筈はあるまい。

此等の言語に徵すれば、ソクラテスは自然に於ける神は身體に於ける心の如く、發見せられてあるを信じて居つたことは明白である。而して其發現のしかたも、頗る直接であつて、丁度甲の人の心が乙の心に分かるよふに、自然に於て神の精神

も分かると信じて居つた。ソクラテスの考は前章に述べた議論に一致して居た。

彼の生涯を見ても、神の親密なる關係を實現せんことを勉めたよふに見へる。彼は普通の神話などにある神々を信じて居つたが、それと同時に宇宙に遍在して居る大思想を認識して、是れが彼の信仰の主なるものであつた、彼は過去の神でなく、現在の神を信じて居た。

希臘文學より猶太文學に至れば、猶更現在の神に關しての觀念が明白である、舊約全書は凡て神が自然に密着なる關係を有し給ふことを敎へて居る、而して其神の思想は事物の秩序變遷によりて明かである、特に詩篇は思想を美的に發表した る表本である、其百四篇をよんで見よ。

わが靈魂よ主を讃めまつれ
　わが神エホバよ汝は至大なり、尊貴と稜威を衣給へり
なんち光を衣の如くにまとひ
　天を幕の如くに張り給ふ
なんぢ水の中に巳の殿のうつばりをおき
　雲を巳れの車となし、風のつばさに乘り歩きたまふ
なんぢ風を使者となし
　焰のいづる火を僕となし給ふ
なんぢ地を基の上におき
　永遠に動くことなからしめ給ふ
なんぢ衣にて覆ふが如く大水にて地をおほひ給へり
　水たゝへて山の上を超ゆ

なんぢ叱咤すれば水しりぞき
なんぢ雷の聲をはなてば水たちまちさりぬ
或は山にのぼり或は谷にくだり
みな汝の定め給へる處に行けり
なんぢ堺を立て之をこえしめず
再び地を覆ふことならしめ給へり
主は泉を谷にわき出てしめ給ふ
その流れは山の間にはしる
斯て野のもろもろの獸にのましむ
野の驢馬も其かはきをやむ
空の鳥もその邊にすみ
樹梢の間よりさへづりうたふ

主は其殿より諸の山に灌漑き給ふ
地は汝の聖作の實によりて飽きたりぬ
主は草をはへして家畜にあたへ、田産を人の用に與へ給ふ
主はかく地より食ひ物を出し給ふ
また人の心を歡ばしむる葡萄酒を與へ
人の顏をつやかならしむる膏、ひとの心をつよからしむ
る糧をあたへたまふ
主の樹はあきたり
その植たまへるレバノンの香柏は飽きたりぬべし
鳥はその中に巢をつくり
鶴は松を其すまひとせり
山羊には高き山あり

山鼠のかくれがには岩あり
主は月をつくりて時をつかさどらせ給へり
日はその傾くを知る
なんぢ黑暗をつくり給へば夜あり
その時林の獸はみな忍ひ〳〵に出で來る
わかき獅子ほへて餌をあさり
神に向ひてくひものをもとむ
日出づれば彼等しりぞき
皆その穴にふす
人は出でゝわざをとり
その勤勞は夕にまでいたる
主よ汝のみわざはいかにさはなる

これらは皆汝の智惠にて造り給へり、汝の諸の富は地
にみつ
かしこに大なる廣き海あり
その中に數しられぬ匍ふもの、小なる大なるいけるも
のあり
舟その上をはしり
汝の造りたまへる鰐その中に遊び戲ふる
彼ら皆汝を俟ち望む
汝よき時に食ひ物を之に與へたまふ
彼らはなんぢの予へたまふ物をひろふ
なんぢ手を開きたまへば、彼ら佳き物にあきたりぬ、
汝ぢ聖面を覆ひたまへば、彼らはあわてふためく

汝彼らの息をとり給へば、彼らは死て塵にかへる
なんぢ聖靈を出し給へば、百物みな造らる
なんぢ地の面を新にしたまふ
願くば主の榮光とこしへに在んことを
主その聖作をよろこび給はんことを
主地を見給へば、地ふるひ
山に觸たまへば、山は煙をいだす
われいける限り主に向ひてうたひ
わがながらふる程は、わが神をほめうたはん
主を思ふわが思念はふかくたのしかれ
われ主によりてよろこばん
罪人は地より絶ち滅され、惡しきものはまたあらざるべし

わが靈魂よ主を頌めまつれ、汝ら主をほめたゝえよ

而して第二十三篇を見れば其思想は神を近くに見ざる人の考へとはとても同一視することは出來ぬ、確かにヘブライの經典には自然によりて神を見る今日の觀察が表はれて居る。

次に新約全書の全篇を通じても、神か宇宙を主宰し給ふと云ふ思想は極めて明白である。次の語は其最も美き例である。

何故に衣のことを思ひわづらふや。野の百合花は如何にして長つかを思へ勞せず紡がさなり。

われ汝に告けん、ソロモンの榮華の極の時だにもこの花の一に及ざりき。

神は今日野に在て明日爐に投入らるゝ草をも如此よそわせ給へば況て爾等をや、嗚呼信仰うすき者よ、然ば何を食ひ、

何を飲み、何を衣んとて思ふわつらふ勿れ（此みな異邦人の求むるものなり）爾等の天の父は凡て此等のものゝ必要なること知りたまへり。

此等の語は、どうしても神が唯過去の神であつて、又此世より遠く離れて居とは解釋することは出來まい、又聖保羅がアレヲ山に於ける演說に於ても、此の思想が同樣に明白である。

それ宇宙と其中の萬物を造り給へる神は是天地の主なれば、手にて造れる殿に住たまはず。

かつ衆人に生命と萬物を予へたまへば　物に乏しきことなし、人の手にて事らるゝものに非す。

また一の血脈より出し凡の民を悉く地の全面に住ませ豫め其時と住ところの界とを定め給へり。

此は人をして神を求めしめ彼等が或は揣摩（さぐり）る事あらん爲めなり、然ども神は我儕各人を離るゝこと遠からざるなり。

それ我儕は彼に賴て生き、また動き、また存ことを得るなり爾等の詩人たちも我儕は其裔なりしと云しが如し。

人は唯神が過去に於て創造し給ひしことに由つて、生存し活動して居るとは感し能わぬものである、此等の語は人生と神との間に最も親密なる關係があると云ふことを示して居る。基督教禮拜文學も矢張り同一の精神が滿ちてゐる、祈禱書の特禱に。

天地萬物を護りて常に之を理め給ふ神よ、我等に害あるものを除き、益あるものを與へ給はんことを、主イエス、キ

リストによりて希ひたてまつる、（三位一體後第八主日。
主に斷えず　憐恤をもつて公會を淨めてすべての害を防ぎ
たまへ、公會は唯主の祐助に倚りて安全なるか故に、常に
思寵を以て、之を護り給はんことを、主イエスキリストに
よりて希ひたてまつる（三位一體後第十六主日）

禮拜祈禱の語に斯の如き神の觀念あるは固より自然の事であ
る、前に述た通り、眞正の意味に於て宗教と云へば神と人と
を隔離し能はぬのである、宗教思想は自然に就て彼のジョー
ヂ、バーバートが感せし如く感する傾きがある。

聖きみかみの御こゝろは　始め終りをおしなべて
强くゆかしくますぞかし　拙き筆を手に取りて
描き出さんよしもがな　筆とる此手もよそならず

神の賜ひしものなれば　御わざをたゝへざらめやは

これによりても遠距離に於て物を見る如く、神は自然界より離されて居らぬ。神は自然の裡にあり、自然を通してあり、自然に意味と價値を與へて居るのである。又コールリヅヂは左の如く世界の中に神を見る。

深き谷間のすめら神　夜の黑暗と戰ひつ
東の空に照り昇り　西の山邊に沈み行く
あしたの空に群をなし　曉天に輝ける
星とやともにましまさん　ほめたゝへよや諸共に
曙てらす大神を　黑白もわかぬやみのよを
うちやぶりしはたれなるか　明けく輝く御ひかりを
賜ひしものはたれなるか　流れつきせぬ谷川の

その泉はたれのわざ

波さわきたつ早瀬に
暗く凍れるはざまより
斷崖をくだりて瀧となり
今も昔もかわりなく
賜ひしものはたれなるか
轟きわたるいかづちの
ついに流れてふちとなり
何れ御神の御意なる
ふかくきざめる谿の間に
萬雷とゝろく急流の

闇より死より湧き出でゝ
呼び起せしはたれなるか
岩にせかれて碎れど
かわりたえせぬ永恒を
岩打つ早瀬の水の音は
音にも似たるすさましき
淀みやすらふ靜けさよ

高くかゝれる水流は
瞬時に閉ぢて狂奔を

引とめたるによるなるか
月に映ずる其景色
寶石をつらねしすがた哉
岩根をまとふ虹の幕
たが手の工のなりはひか
氷原答えて神と云ふ
めでたき音もて神を讃む
靜けき琴のしらべもて
降り積りにし雪とても
聲高々に神と呼ぶ

ゆるがぬ流ねなき瀧
神のみや居の門柱
木の間もれつる日の光
紫蘭の薫百合の色
瀧は叫んで神と呼び
牧場ぬい行くさゝ川よ
丘に立並む松林
神のみわざをたゝえよや
谷間に落ち入る夏時は

山の端飾る草花よ

わしの巣ねらふ山羊の隊

山のあらしを友として　空に飛び舞ふわしの群
雲間ひらめくいなづまよ　生きあるものもなきものも
宇宙のつかさ眞神を　ほめたゝへよ歌へよや
谷間おちこち響くまで

是れ宗教心がいつの時代でも自然に對する感想である。此外に多く引照し得べけれども、是で止めるとしよう。固より是等の感想を有する宗教家が、充分に自分の感想の意味を了解せめかも知れぬ、或は一々理屈を云ふことは出來ぬかも知れぬ。然しながら彼等は此の感想を維持し、之によりて生活するによりて慰籍を得てゐる。信仰は一の事である。其信仰を理論の式に合せしむるは他の事である。

第五章　神教（シエズム）か　万有神教（パンシエズム）か

古今の宗教文學は、予が前に述べし方法にて、人が自然界に、神を見出すことを證すれども、なほ讀者が此を考ふるとき、直に、之を是認するに躊躇せらるゝであらふ。恐らくは次の如き疑問を起さるゝであらふ。汝は人體が其心を表示する如くに此世界が神を示現するものとして觀察せよと云ふが、是は奇妙なる觀察ではないか、此世界は神の體であるか、神は體を有するか、さらば、此世界は神であるかと、予は、予が前に述たる神に對す見解は果して如何なる意味であるかといふことを明かにして此疑問に答へようと思ふ。

リストによりて希ひたてまつる、(三位一體後第八主日。

予は先づ、神教と汎神教として知られておるものゝ區別を明かにせなければならない。前にシエズムとデイエズムの相違を述べたときに、シエズムは單に事物の創造者としてでなく、保護者、主宰者として、自然に表はれたる神を信ずると云つた、予は決して自然が神であるとは言はなかつた、自然に現はれたる神と語つたのである、後又た神の自然界に示現し給ふ方法を説明した。更に吾人が自然界に神を見ると云ふのは、吾人が他人の心を其身體の徴候によりて發見するのと、同じ事を意味することを示した、即ち之がシエズムである。パンシエズムなる語は極めて漠然たる意味に用いらるゝが、もしそれが何等かの明瞭なる意味を有するものとすれば是は單に自然即ち神なりとの信仰を意味するのである。純然たる汎神

教者は、神と自然とは明白なる區別あるものにして、神は自然よりして發見し得べきものなりとの見解を有せず、自然其の物を神なりと思ふのである。斯の如き人は、他人の心の存在を其身體の諸活動よりして推論し得る如く、神の存在を推論し得べきものなることを考へ能はざるは明かである、汎神教者に取りては心を探るに要する凡ての論證を適用して神を探究すること等は、全く無用なることである、彼は直接に、此世界を見るのであつて、推論などの必要は少しもないのである。併しながら、そうすると、神は彼自身の心以外に存在する一の心、或は心の如き或物であると云ふことでなくなる。他人の心が自分の心にわかる如くに、神も自分の心にわかるものであると云ふ事でなくなる、人は斯くの如くに他人の

予は先づ、神教と汎神教として知られてゐるものゝ區別を明かにせなければならない。前にシエズムとデイエズムの相違を述べたときに、シエズムは單に事物の創造者としてでなく、保護者、主宰者として、自然に表はれたる神を信ずると云つた、予は決して自然が神であるとは言はなかつた、自然に現はれたる神と語つたのである、後又た神の自然界に示現し給ふ方法を説明した。更に吾人が自然界に神を見ると云ふのは、吾人が他人の心を其身體の徴候によりて發見するのと、同じ事を意味することを示した、即ち之がシエズムである。パンシエズムなる語は極めて漠然たる意味に用いらるゝが、もしそれが何等かの明瞭なる意味を有するものとすれば是は單に自然即ち神なりとの信仰を意味するのである。純然たる汎神

教者は、神と自然とは明白なる區別あるものにして、神は自然よりして發見し得べきものなりとの見解を有せず、自然其の物を神なりと思ふのである。斯の如き人は、他人の心の存在を其身體の諸活動よりして推論し得る如く、神の存在を推論し得べきものなることを考へ能はざるは明かである、汎神教者に取りては心を探るに要する凡ての論證を適用して神を探究すること等は、全く無用なることである、彼は直接に、此世界を見るのであつて、推論などの必要は少しもないのである。併しながら、そうすると、神は彼自身の心以外に存在する一の心、或は心の如き或物であると云ふことでなくなる。他人の心が自分の心にわかる如くに、神も自分の心にわかるものであると云ふ事でなくなる、人は斯くの如くに他人の

心を見ない。加之、一の心が他の心と、關係を有する事を感ずる場合に、自然に起り來る愛情や、尊敬の念の如きも、汎神教信者の心には、正當に之を考へ得られぬ譯である。人の愛する處の者は人格である、若し人が、普通に用いらるゝ意味に於て、人格を認むる事が出來ない或ものに對して、此愛情を起すならば、其人は其用ゐて居る言語に誤つた聯想を有て居るか。或は已れの思想が幾分の明瞭を缺くよりして、自ら欺きて、此情を起すに至りしものである。神なる言葉は之を用うるにあたり、其豐富なる聯想により、又其語を發すると同時に自然に起り來る觀念よりして、宗教的感情を起すのである、若し汎神教信者が此世界は即ち神なりと云ふ意味を保つておるならば、彼が世界に對して非常なる尊敬を與ふ

る樣にはなるか知らぬが、矢張り單に世界のみである、如何に世界を神と稱へても世界は神にならぬ。神なる言葉が普通に用ゐらるゝ意味にて正當に世界なる言葉に適用し得らるべきものとならぬ。

所謂汎神教を奉する人々の中には、慥かに大に宗教的の人々もあつたけれども、彼等はチブカトチザルの下に於ける四人のユダヤ人と同じく、榮達の見込が立たぬのである、彼等が單に少しく異なれる意見を有する神教信者でなくて、眞に汎神教信者であるならば、普通に有する意味に於て、彼等は宗教的であると云ふとは出來ないのである、彼等の考へ方が吾等の普通いふ意味に於て宗教的ならば、彼等は矢張り一種の神教信者たるに過ぎないのである。

テニソンの小詩、向上的汎神教は、其題に於て、矛盾をなしてゐる。なぜならば、斯の如き思想が眞に汎神教ならばそれは向上的でない。もしそれが向上的ならば汎神教ではないのである。宗教的感情に訴ふるものは神教的元素である。

日月星辰山海平野、此らはこれ萬物を統御し給ふ神の幻にあらずや、此幻は神にあらざるか、よし神は我等の目に見え給ふ如きにあらずとするも。
夢も續く間は眞なり、我等は夢のうちに生活しつゝあるにあらざるか

*　*　*　*　*

神に語れ、彼は聞き給ふ、靈とは交通するぞかし。神は吸

呼よりも近く、手足よりも近くあればなり。

汎神教信者若し自己の主義に忠實ならば、而して自ら神教信者にあらずと云はゞ、此終りの句は、削り去なければならぬ。そうでなければ、或新しき漠然たる意味にて其等の言葉を用ゐなければならない。

神は單に世界に過ぎないとすれば、死體が聞くことの出來ないと同じく、物を聞き給ふことは出來ない、靈と靈の交通すると云ふ事も出來ないのである、此場合に吾等の語を得るものは『單に日月星辰山海平野』と云ふのみであつて、其れ以上何の意味もないのである、『統御し給ふ神の幻』と稱へてもそれは單に前に言つた日月山海平野なる言葉を繰り出すに過ぎず、何の感じも起らない、吾人は神なる言葉について生ず

る種々の感にあざむかれて、統御など稱すべき事のあるべき筈なきを知るのである

さて此等の事よりして考ふれば、以前に述べたる余の神に對する見解は、決して汎神教といふ事は出來ない、それは、萬物に精神ありとすると、精神なしとするとの一大相違である、此見解は神は自然なりとは云はない、神は人の心が他人の心に分るものと丁度同じ樣に自然を通じて現はると云ふことである。此見解は又吾人が神について證するには普通の判斷に從はなければならぬ事、及び其論證するに當ては吾人が同胞に對すると同し對度をとらねばならぬ事を主張するのである。此見解を有する人は、其友人の身體と心との區別ある事を知つて居る。夫れと同じく、彼が此世界を觀察するに當

ても、彼れの友人に現はれて居る處の心と同じもの、或はそれに似たるものが、此世界にも顯はれて居ると云ふことを信ずる、彼は決して此者を世界其者と混同しない。恰も彼の友人の心を其身體と混同しない如くである、而してこれがわれらの神と呼ぶ所の者であり又宗教的情思の對象たり得るものである。

彼等若し人體に發せらるゝ處の心の徵候と、同じき心の徵候が世界に無しと信ずるに至つたとすれば、是れ迄用い來つた意味に於ては、最早神を信じて居らぬ事を告白せねばならぬ、故に彼等は決して、普通の意味に於て『世界は即ち神なり』と云ふことを信じては居らぬ、予は前に述べた見解が、『世界即ち神』と云ふことを意味せぬかどうかといふ疑問に

充分明に答へ得たと思ふ。

更に進で、予の述べたことは、此世界即ち神の身體なりと云ふ事になりはせぬか。若しそれであるとすれば、是は驚く可き意見ではないかと云ふ、疑問に答へよふ、然しながら、先づ第一に承知せねばならぬ事は、吾人は、常に斯の如く語らぬと云ふとである。猶又、斯の如く語るは我等の好まざる事である、神の世界に對する關係は人心の人體に對する關係に似たものがあるが、それと同時に其類似たるや、直に身體なる語を以て世界と云ふ語に應用せらるゝ程に密接でないと云ふ事が出來きる、此の身體なる言葉は吾人の心に種々な聯想を起さす故に、此場合には吾人が此語を用ゆるを躊躇するは當然のことである。吾人が此身體なる語を用ゆる場合には、

一種の形狀、構造、及器能などを考へる。是等の性質は、動物體としての人體に屬するものであるが、事物を全體として見る場合には、此等のものを發見することが出來ぬ。困難は唯言語と其聯想とにあるので、若し吾人が其言語をとり去りて、神は世界全體によりて現はれておる、其現はれ方は、恰も人心が人體と稱する物質の小塊によりて現はるゝのと同じ樣であると云ふ思想のみを取らば、別に驚くことでもなければ、又新奇な事でもないのである、從來多くの人は此を漠然と解して居つた、唯小數なる人によりて幾分か明解せられたのである。神の現在とは、かくの如き意味に外ならないのである。勿論此は他人の誤解を避くる樣に言はなげればならない。薔薇の花も他の名にて呼ばれたならば、あれ程の佳香をはなたぬ

かも知れぬ。事物の名は其れに對する吾人の意見に非常に影響する、議論其物は決して反對を起すべき程のものにもあらざるに、唯其名の正しからざるため、或は誤解に導き易き名ある爲に、反對を惹起すこと屢々あるのである。　能く考へぬ人は、屢々其名のみによりて其の思想を商量することをせない。又主として思想に重きを置き、其文字に關はらざる人々すらも其名が呼び起す所の聯想を全く拂ひ去ることは極めて困難なることである。されば神及び神が此世に存し給ふ見解を述るに當りても、自身及ひ他人を誤まらしむる如き方法を避けねばならない。新奇なる言葉或は聞慣れざる言葉を用ゆることはよくない。予の述べたる見解にして、正しく人に解釋せられたるならば、宗教心に厚き人々の反對を招くと

なきは明かである、若し明かに見解せらるゝならば、此見解は一方には自然神教より、又他方に於ては汎神教より、神教を區別し得るものとして歡迎せらるゝならんと思ふ

第六章　自然に於ける法の支配

本章及び次章に於ては、近世科學の立脚點よりして、神の存在説に對する二三の反對論を考へて見たい、本章には先つ自然に於ける法の支配に就て論じたい、前の章に於て論じた通り「アラビアンナィッ」に記載せられたる彼の驚く可き事柄は子供の心には如何にも自然にして且つ面白き事柄なれども、生長したる人には頓と興味がない、其事柄か如何にも自然に反して、且つ道理にも背いて居る樣に見へる。自然と云ふ事に

就て余り經驗のない小供心には自然界には色々と不思議なる事の起るは當然の樣に成ひ居れども、段々と智識の發達するにつれて此考へが一變し、自然界の事はチャンと定まつた秩序があつて一定の法則に從つて居るものと思ふに至る。最も初めは漠然とした經驗であるが、後には立派な因果法に依て支配されて居ると云ふ意識を有することになる、そうなると、世の中には何事でも自由自在に起ることがあると思はぬ。起るなら、起るべき原因があつて起ると信ずる。原因があれば必ず結果があり、原因がなければ結果も生ぜぬと斷定するに至る。此原因結果の理法を自然法と名づく、此法には特別法とか、除外例とか云ふものはなく、何事も此法則に依て說明することが出來ると信じて居る。換言すれば、自然界には亂す

べからざる秩序ありと信ずるに至る、個人として其通りであるが、人種として同樣である、科學が證明する所の議論は次第に一般人種の信ずる所とはなつた。自然界の事柄は中々復雜であつて、且其勢力の結合も隨分込み入て居れば、同じ原因は必を同じ結果を生ずると云ふ事は容易に承認せらるゝ事でない。且又た事物の秩序は決して破れずと云ふこも速斷がしにくいのである。自然界は秩序ありと云ふ事、又通例原因結果の法則に從ふと云ふ事も信じ得らるゝが、然し吾人は未だ自然界の凡てのものを考察した譯でなく、比較した譯でもなし、因果法に除外例なしと云ふ斷定をなし得る程、まだ自然界の事を研究して居らぬのである、恐らく、多數の人は自然法を以て動かす可からざるものなりとは信じて居るまい、更

に智識が進歩したらば或は却て法則の範圍外にある自然界の事物を發見するやも斗り難いと考へて居る人もあらう。然るに又た他の方面より見れば、今日まで發達したる因果法より して、尙ほ發見せざる所も、智識が進歩すれは、愈以て此の自然法の支配を受けて居ることを曉るに至らんと云ふものもある。孰れにしても、其眞否は人智が完全にならなけれは分らぬ。

然し人々從來自然界の出來事を概括して、組織體として解釋し、其方法を求めつゝあつたのは事實にて、自然界の一部分たる人間をも他の事物と均しく一の合法的組織體であるといふことを發見するに至つた。人の身體は確かに他の動物の如く動くものにて、醫學は必竟するに、其活動が一定の法則に從ふ

と云ふ考へから成り立た科學である。若し思想の發表が不規律なれは心理學なるものも成立するとか出來なかつたに相違ない種々なる議論の中にある「人の意志」なるものも、少しも法則に服從せぬものとは到底考へられぬ。吾人は人の意志を動さんがために奬勵をなし、人の意思を屈服せしめんために譴責もする、或動機は自然に或動作を起すことを認識する。故に動機により動作を說明するとも出來るのである、吾人は「人がかく〳〵するのが自然の勢だ」と云ふことがあるが、此自然の勢とか、自然の結果とか云ふのは、多少前に起りしものはかく〳〵の結果を生ずる筈なりとの考に相違なからふ。

或學者は人の意思が自然の方則に從ふと云ふのは唯一部分の

ことであつて、前にありし心の狀態の動機で以て人の凡ての行爲を說明する譯には行かぬと云ふ、又或學者は人の行爲者は自由の意思に基くものでない、皆必然の自然原因がある。分らぬことがあるは吾人の智識が足らぬからである、若し吾人の智識が完全であるならば、人の行爲は凡て方則に從つて居ることを知るのであらふ。今日吾人が觀察によりて得たる智識の程度にては此兩說の眞否を決定することが出來ぬ。人の行爲は中々復雜して居つて、充分に說明することが六ヶしい、人が經驗によりて此問題を決定するにいたるとは隨分遠い未來のことであらふ。

以上の問題は甚だ興味ある問題である、然し予は神の存在を說くのであつて、それには必ずしも右の問題を決定する必要

がないのである、唯自然(人をも含む)なるものが一定不變の方則に從ふものとすれば、何か神の存在を論ずるに影響するのであらふか、神かなくなりはしまいか、神と人との關係に就て考を變せねばならないのである。如何となれは世には神は自然法によりて活動して居るといふよりは寧ろ自然法を破るものとして表示されて居ると考へる人が隨分ある。又自然に就て法を認める人は不變の神を無視するのであると考へている人が多いからである。此の問題に答ふるに當て、予は是迄述べ來つた神の存在論を明瞭に心に留められんとを望むのである。讀者は、予が人の身體と其活動の有樣より推論して人心の存在を知る如く自然界の物より推論して神の存在を知ると云つたのを記憶せらるゝであ

らふ、同じ方法にて研究が出來るものなりと予は主張した、人心の存在を信ぜしむるに至る論法と、神の存在を信ぜしむるに至る論法が、其性質に於て同一であるならば、神の存在を推論する事能はざる議論は、人の心を推論するとも不可能としなければならぬ、然かし人心存在の論證を破壞する事が無けれは、神の存在の論證をも矢張破壞する筈はないのである。而して吾人は自然の法則が整一不變にして、萬事皆自然の必要に從つて起るものならば、勿論人も此自然の法則の支配を受けるものであると考へられる、人のなす所の言動は凡て前にありしもの、必然的結果であつて決して任意に生じたものでないとせなければならぬ。吾人が、彼と彼の周圍に働きつゝある凡ての自然力を知り、而して之を計算する能力を持て居れ

ば、卵の地に落つるに先ちて其碎ける可きことを豫期し得る如くに、人の言動を豫期し得るものである。果して此等の事皆然りとせば、吾人の前に立て賢く語り正しく動きつゝある人體が、單に其言動に何等の不規則なとがないと云ふのみで心を現はして居らないと云ふことであらふか。多くの慈善的行爲が、よし如何に規律正しく爲されたとしても、それが親切なる心より出でたるとを疑ふべきか、人の思想の身體に現はれたる表彰が、世界の普通の法則によりて說明するとの出來る程順序正しく起つたからとて、直に其は彼の心の表彰でないと云ふとが出來るだろふが、心を顯はす所の身體の動作が、吾人の經驗に照らせば、人智の進歩するに從つて人性に於ける未知の部分は減少し斯々の動作は一般に斯々の動機の結果と

して生するものなりとの豫想を強からしめた、則ち人性は或程度迄の法則に支配せらるゝ處のものであるとの知識を增加したが、然かしこれがために吾人をして人の身體が其心を顯さぬと云ふ事を信ずるに至らしむる樣な傾向を見ないのである。反之吾人の心が或は賢不賢又は善不善なるものとして顯さるゝことを少しも疑はぬのである。

而して人事は凡て自然の必要に支配せらるゝと云ふ極端なる見解を有する人々でも、人の心が身體によつて顯はされると云ふ事を信せないのではないのである。斯の如き人々も他の人々と同じく結婚する、其子供を愛する、又其子供に愛せらるゝことを信ずる。彼等も他の人々と同じく親友も持てば、仇敵をも有する。彼等は其同僚に懇請するのを躊躇しない、而して何

か望のあるときには其叶へられんことを待ち望む、彼等は凡で此等の事は自然法則なるものに反して居るとは思はぬ而して一の心が他の心に顯はされ、如何樣にもあれ其動作に影響を及ぼすを見ては、是即ち自然の法則にして疑ふべからざる眞理として受け納る可きものであると主張する、彼等の信仰は少しも他の人々に對する實際の體度を變ずることなく、又彼等の社會的關係は少しも其親密さの度を減することはない。

然らば自然の法則が不變なりと云ふ教理が、人體と稱する自然の一少部分に顯はれたる心を信ずる事に影響を及ぼす事なきならば、何故に自然の凡の部分に顯はれたる一の大なる心を信ずる事に影響を及ぼすか、慥かに斯の如き人間に限り都合よき理由はないのである。

此見解は少くとも祈禱が事柄の順序を變更する効驗ありといふ信仰を破る可しと云はんか、されと「他人に願をなす而して其願ひたるが故に與へられる」と云ふ事のあり得ると云ふ信仰を破るに非されば、決してさる事はないのである、此事が普通の事ならば前の事も亦普通の事である、而してそれは丁度同じ意味に於てである、此二ッの場合に於て何れも單に事實の問題である、祈の聞かるるか、聞かれざるかにあるのである、自然の不變と此問題と關係する所はないのである。

第七章　物質の無究性と進化論

前章に於て法の支配と云ふものは、一般的のものであるか、或は場合によりては、除外例を與ふべきものであるか、之を

決定することは予の目的でないと云ふた。其の如く、物質及び力は無究のものか、無究でないか、或は進化論は許容すべき議論であるか、許容すべからざる議論であるか、之を決定するは本章の注意でない、唯本章に於て簡單に述べたい事は、若し是等の學說が是認せられたとすれば、神の存在論に影響する所があろふか、夫れを述べて置きたい、物質無究論や進化論は是認すべきものでないと思ふ人にとりても、此問題は隨分興味ある可しと信ずるのである。一人の武士ありしが、鼠が自分の馬背に馳せ廻はるのを五月蠅く思ふ懸念から、其鞍にも鼠取りを附けた。武士は固より其樣な所に鼠の來るとはあるまいと思つたが、先づそうして置けは安全だと思つたからである、物質及び勢力は無究である、不滅である、且つ此理

論を確實ならしむる爲めに、此等の論者は其證據たる可き材料を集めつゝあると信じて居る、夫れ故に若し此等の研究が進んで、物質勢力の消滅論が成立し、進化論が眞理とならば、我有神論の根據はどふなろふかと心配するよりも、此等の議論か如何に成り行かふとも神はなくならぬのであると確信することが出來たならば尙ほ安心であらふ。此等の議論か是認せられよふと非認せられよふと、又どちらとも判からぬとしても、學者の研究に對して滯面する必要もなく、忍耐と宏量とを以て其研究の結果を待つことが出來る、予は本章に於て極簡單に此問題の解決は如何にも興味あるものなれども、神の存在論に關しては、必要なる問題でないと云ふことを示そうと思ふ。

簡單に述ぶれば、物質及勢力の理論は、唯事物の組織は時間に於て始めと云ふことがなく、常に存在して、一定の法則に從ひ種々の變化を來たしたものと云ふにあり、物質及勢力の全量は增しもしなければ、減じもしない。唯其形狀に於て變化するものである、自然界の法則は一致なり、秩序なりと云ふ說が神の存在論に關係しないと云ふことは既に述べたのである、今は此千變萬化する自然界に始めがないと云ふ時に、神の存在論に影響するであらふか、夫を研めて見たいのである、若し人が神の存在を證するに當り、結果より原因と段々遡り、終に因果律の最初點に及びて、神の存在を認むるものとすれは、即ち萬物の創造を以て神を見出す唯一の方法とすれば、物質勢力の無究は物の始めを否定するもの故、神は無くなる譯である、

世の所謂ディエストと稱する神教論者は前に述べたる如く、此方法によりて神を見出さんとするものゆえ、世界の無究に遡ることは出來ない、從つて神を信するとも出來なくなる。然しながら、若し人が、シエストと稱する神教論者の如く、今此に神を見出すことが出來て、過去に遡て其存在の證據を求むる必要なしとすれば、世界が無究であると云ふ議論が少しも其信仰を破壞せぬのである。若し萬物の組織が現在に於て、又何時にても、神を表示するものとすれば、如何に永く此世界が存在せしかと云ふ問題は即ち如何に永く神は此世界に表示せられしかと云ふ問題に外ならなくなる、其處に神があるか、ないかと云ふ問題は毫も起ることはない、予は毎度ながら讀者に望む所は此大心意を論ずる其論法は、人の心

意を論ずると同一なる常識と手段とによらんとである。

人の言行によりて、其人に思想あることを證明し得るとせば、過去永い間其人に思想あるの證明があつたからと云つて、現在には左程の證明がないといはれ樣か。假りに人ありて無究の昔より常に其言行によりて思想を現はし來りしとせんに、同じ人が現在にては同じ方法にて其思想を表はし得ぬと云はれよふか、若し世界が永遠の昔より存在して常に一大道理の證據を有するものとすれば是れこそ永遠の昔より神の存在を意味するものではないか。

次に進化論に就て考ふるに進化とは一定の法則に從かひ今あるものは先にありしものを引繼ぎたとの意である。後のものは、前の者の中に含有せられて居たとの意でもなく、後のは

前の者よりも高尚であるとか無いとかの意味を有せない、サー、アイザック、ニユートンは始めは殆んど身體もなく心もないが如き嬰兒であつたに相違ない、而かし以前如何なる嬰兒であつたことを知つて、後の大學者としてのニユートンに對する崇敬を失はないのである、現在に於ける萬物の狀態は一定の法に從つて過去の情態を引受けたと云ふても、それが現在の世界を非議することゝはならぬ。

自然界の組織は一定の法によりて漸々と開發するものか或は其歷史に斷絕があつたか、孰れにしても神の存在論は依然として影響を受けぬ。若し進化論者が萬物は秩序的に開發し、因果法によりて動くものと云つたとしても、是れが自然界は一大心意を表示するものでないと云ふ議論になるであ

ろうか。秩序と一致は心意の表示を防止するものではあるまい、自然界の規律正しきことは、神は隨意に事をなし給はぬと云ふ證據にはなる可し、神は萬物の中に自己を發表し給はぬと云ふ證據にはならぬ。

余が思ふ所では、科學者が神の存在論を破壞する一つの方法がある、唯一である。そは即ち科學者が若し自然界は不條理不規律である。又物は心を表はすものではないと云ふことを證明し得たらんには、彼は神の存在論を撲滅し得るのである、此以外には如何なる大議論を持ち出しても、神の存在論は依然として存在する。

第八章　結論

前章に於て、神の存在を證明するの法は、普通に人の心の存在を證明する法に外ならぬことを論じた、從て心の存在を否定し得ない以上は、神の存在をも否定し得ないことを說明した、徹頭徹尾有神論と有心論とは同一なる事を主張した。此論點よりして自然法論や、物質不滅論や、宇宙進化論を根據として發する處の反對論は神の存在論に向つては的違であることを云つた、此等の事を能く記憶して置けば、神と云ふことを考ふるときに、余程の助けになるであらふ。例せば、神の存在に關して解釋し得ない新問題に遭遇し、多少疑惑を生じたる場合には、普通人間の心を證明するにも同樣の困難があるであらふ

かと踏み止まつて考へて見るが善い。矢張り同じ困難があつても人の心の存在は疑はれぬと自ら信じて居れば神の存在をも信じて善いのである。

人が予に向つて斯く細々と論ぜらるゝ神は、全體何處に存在し給ふやと問ふものあらば、予は其人に答つて、若し人の心は何處にあると云ふことを示されたならば、予は神の所在を示すであらふと斯く答へるのである。困難は同一である。

予の有論論は是れて終つたのであるが、一言加へて置き度い事は、本論を通じて用ゐたる學語は、普通一般に解釋せらるゝ意味に於て用ひたのである。或は自分以外の世界とか。原因とか結果とか、自然の啓示、他の心といふ樣な語を用いた、別に一々其說明は仕なかつた。而かも哲學者は隨分學語の上に

彼れ是れ云ふものであるが、予は予の議論の主意か明瞭になれば自ら滿足するのであるから、深く言語の上に立入りしない又哲學者であれば、予が是れ迄論したのを讀んで、是れで充分とは思はぬであらう、必すや大論文を提出するであらふ。是れには自我と非自我の區別とか、如何にして一の心か他の心を直覺することか出來るとか、全體精神は何處にかあると云ふことが言はれるであるかとか、色々に六ケ敷議論にも、立入るであらう。是等は予の問題でない、若し前章より論し來りし主張が道理であるなるば、一層明瞭に詳論する方法は澤山あるが、之を否定する議論は一もないと思ふのである、哲學者でない所の普通の人は是れで滿足が出來ると思ふ。

明治四十一年十月二日印刷
明治四十一年十月五日發行

定價金十錢

譯者　元田作之進
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

發行者　福永文之助
東京市京橋區日吉町四番地

印刷者　渡邊爲藏
東京市京橋區日吉町四番地

印刷所　民友社
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

發行所　警醒社書店

不許複製

253
903

米國コロンビヤ大學教授ドクトル、オブ、ヒロソフイー、ギヂングス原著
日本立教大學校長ドクトル、オブ、ヒロソフイー元田作之進先生校閲
日本警醒社書店編輯部譯

社會學

菊判上製
定價一圓三十錢
小包料十二錢

本書は社會學の泰斗ギヂングス博士が講述したるエレメンツ、オブ、ソシオロヂーを譯したる者なり。

中島文學博士序
立教大學校長元田作之進
熊本高等工學校教授高橋正熊先生共譯

アリストテレース倫理學

菊判上製
定價一圓六十錢
小包料十二錢

附ア氏倫理學筌蹄